

修士論文（要旨）

2012年1月

基本的な傾聴学習が臨床心理学初学者の
共感的態度の形成に及ぼす影響について

指導 種市康太郎准教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
修士課程
210J4006
高野 喜一

目次

1. 問題と目的	1
2. 方法	1
3. 結果と考察	1
引用文献	

1. 問題と目的

現代社会において、子育て支援、産業界といった現場で、臨床心理士の社会的ニーズが高まっている（清水・河合・大塚, 2003）。このような現状の中で、学校や職場など、様々な場所で臨床心理士によるカウンセリングが導入されている。金沢（2002）は、臨床心理士が専門職として確立されるためにも、その教育を吟味することは不可欠であると述べており、そのためにも、カウンセリングの教育の基本モデルを構築することは重要と言えるだろう。

Carl Rogers はセラピストが何をするかといったことよりも、セラピストとクライアントの関係のあり方が重要であると主張し、セラピストの治療促進条件として6条件を提示し、その中の3条件（共感的理解、自己一致、無条件の肯定的関心）は現在でも学派を超えて重要視されている。下山（2000）は、「臨床面接で必要とされているのは、『聴く』コミュニケーション能力であり、クライアントの語りを援助するためのコミュニケーションである」とカウンセリングにおける傾聴の重要性を指摘している。

臨床心理学初学者の学習や教育を目的とした技法に、マイクロカウンセリング技法がある。現在では米国の多くの大学や訓練期間、多くの日本の大学院で採用されている（玉瀬, 1990）。

そこで、本研究では、傾聴学習を行う前と学習後の臨床心理学初学者の模擬面接を行った音声データを分析し、聴き手役がマイクロカウンセリング技法を使用することと、話し手役が話しやすいこととの間にどのような関連があるのかを、聴き手役、話し手役の発話量や質問紙の結果といった量的側面と、聴き手役の技法の運用の仕方と話し手役の語りの内容としての質的側面から検討し、基本的な傾聴学習が臨床心理学初学者の共感的態度形成に及ぼす影響について分析を行う。

2. 方法

本研究では、聴き手役1名、話し手役1名の模擬面接を設定、実施し、面接終了後、両者に対して質問紙を実施した。臨床心理学専攻の大学院修士課程1年生11名（男性3名、女性8名）に聴き手役の協力を依頼した。話し手役は臨床心理学専攻の大学院修士課程2年生、男性2名が担当した。

実施時期は、第1回目は2011年5月、第2回目は同年8月に実施した。聴き手役、話し手役は模擬面接を20分間実施し、終了後に、両者に質問紙を実施した。

質問紙は、池見・久保田・峰山（2001）が作成した、SFRI ver. III（Short Form Relationship Inventory version III）を使用した。これは、聴き手と話し手の関係認知（共感的理解、自己一致、肯定的無条件の関心）と傾聴訓練の成果（成功感）を測定するものである。

逐語を記録し、発話量を測定した。内容はマイクロカウンセリングの技法（福原・アイビイ・アイビイ, 2004）を基準で評価した。

3. 結果と考察

今回の結果より、技法と態度形成の学習を一定期間行うことで、話し手の聴いてもらったという気持ちに変化し、話し手の発話量は増えることが分かった。傾聴学習を一定期間受講することで、聴き手の質問技法が減少し、感情反映技法が増加したという傾向も見られた。

傾聴学習を行っていない場合は、話し手の主訴を詳しく聴こうというのではなく、原因はなんであるかといった関心で聴く傾向をもっていた。感情反映技法については、使用しないか、または使用しても、感情ではなく事柄に関心を持って話を聴いてしまう傾向をもってい

た。

一方、傾聴学習を行った初学者は、緊張感はあるものの何をしてよいかわからないという態度はなく、話を聴こうとする姿勢ができるようになり、傾聴技法の重要性を認識し、話し手を正確に理解するために、話し手が述べた言葉をそのまま応答することで、わかりやすさを心がけることができるようになる傾向が伺われた。話し手がどのような感情を持っているか関心を持ち、話し手の話に共感しようと心がけていた。ただ、感情反映技法の技術が未熟なため、話し手の話に共感するのは難しいと感じられた。

初学者が傾聴学習を行うことで、技法を習得や仕様、基本的な傾聴姿勢などは身につけることができるということが分かった。それによって、話し手が話しやすくなり、聴いてもらったという感覚が多少現れるということも分かった。

また、模擬面接を通じて、話し手が聴き手に本当の気持ちを聴いてもらったと感じることは非常に難しいということがこの研究を通じて明らかとなった。初学者は特に継続した面接のトレーニングが必要と考える。岩壁（2005）は面接の有効性を判断するには、クライアントからのコメントから判断するべきであると述べている。初学者の学習においては、初学者同士で模擬面接を行い、逐語記録を作成し、お互い率直にコメントしあうという行為を数多く行うことで技法や態度が形成されていくのではないかと考えられる。

このような地道で継続的な学習が、初学者の成長につながり、将来、臨床心理士として活動する際に、役立つのではないかと考えられる。

引用文献

- 福原真知子・アイビイ,A. E.・アイビイ,M. B. (2004). マイクロカウンセリングの理論と実践 風間書房.
- 池見陽・久保田進也・峰山幸子 (2001). 積極的傾聴(Active Listening)における促進条件測定 Short Form Relationship Inventory version III (SFRI ver.III) 作成の試み 産業カウンセリング研究, 4(1・2), 1-8.
- 岩壁茂 (2005). 心理療法の効果測定 ―初回面接の実践効果研究 臨床心理学, 5(1), 123-128.
- 金沢吉展 (2002). 臨床心理学における心理療法教育の目標, 方法, および今後の課題 精神療法, 28(4), 410-418.
- 清水繁・河合隼雄・大塚義孝 (2003). 高等教育としての臨床心理士養成 臨床心理士入門 (指定大学院編 2003) 日本評論社 Pp2-9.
- 下山晴彦 (2000). コミュニケーション 1 下山晴彦著 心理臨床の発想と実践 (心理臨床の基礎 1) 岩波書店 Pp109-135.
- 玉瀬耕治 (1990). 基礎的なカウンセリング技法の習得に及ぼすマニュアルとモデリングの効果 カウンセリング研究, 23, 1-22.